

第12回 日本は墓標列島か？

IT生

熊本地震の被害状況をみると、防災への取り組みという点では、阪神大震災以降の教訓が全く無視されていた、としかいいようがない、いわば「惨状」である。それは、住民の「熊本には地震はないと思っていた」という言葉に集約される。阪神大震災の神戸・阪神間の住民がまさにそうであった。



阪神大震災以降、『教訓を』の声もむなしく全国で慰霊碑、墓標が増え続けている

ただ、神戸・阪神間と異なり、熊本には阿蘇があり、今回動いた断層帯の存在は十二分に知られていた。また、熊本県は、27年度の地域防災計画をみるかぎり、過去の地震被害の歴史と断層の存在、そして発生確率が全国の断層に比して高いこと、また、一方で、熊本県人の防災意識がとりわけ低いことは認識していた。

にも関わらず、なすがまま“惨状”を呈してしまったのはなぜか？ それは、地域防災計画で示された災害への認識が、行政や住民の具体的な防災行動に落とし込めてないからだ。マスコミは、「熊本県、地域防災計画の見直しへ」とかき立てるが、何度見直しをしたところで、行政や住民の具体的な行動に反映されないかぎり、防災は進まない。だから、災害対策基本法が、東日本大震災以降、見直され、行政が定める「地域」防災計画のみならず、住民の防災行動・目標を具体的に取り決める「地区」防災計画の作成が不可欠だということになったのである。

「地区」防災計画というのは、分かりやすく言えば、運動会の練習のようなものである。幼稚園児でも、プランを明確にし事前に練習をくりかえしていれば、運動会の本番で、先生の号令一下、ほぼ予定通りに行動するのである。いくら、大人でも、プランも明確に示されず、練習もしなければ、いきなり「さあ運動会始めます」といわれたところで、行動できるものではないのだ。その程度のことである。

つまり、自然災害になすがままにされるということは、「その程度」のこともやらずに、われわれは、毎日をただ、ぼんやり時間を浪費しているだけということ強く認識すべきだろう。いくら、優秀なビジネスマン、キャリアウーマンといったところで、地球規模で考えると、とるにたらないことだと気付くべきだろう。

ところで、北海道で痛快事があった。お仕置きで、置き去りにされた小学二年生が、大方の予想を裏切り、1週間ぶりに無事発見されたのである。自衛隊の臨時宿舎に潜り込んでいたというのである。不明当日から「自衛隊の演習場にいた」といっていることから恐らく、彼はその存在を知っていたのだろう。水道の水だけで、マットレスにくるまり生き延びた。自衛隊のレインジャー部隊顔負けである。大人たちの大騒ぎをよそに、実は、ひとりで基地ごっこを楽しんでいたのではあるまいか。大人たちの完敗である。捜索には莫大な費用がかかっただろうが、ただの水だけで子供ひとりが同じ時間を過ごし得た。まさに、これぞ「防災の真骨頂」である。備え、なんらかの予備知識があれば、災害が起きても、被害が最小でやり過ごせる。何も知ろうとせず、備えをしなければ、結果莫大な費用がかかることになる。しつけの可否などといってないで、まずわれわれは、この少年に多くを学ぶべきだろう。

(平成 28 年 6 月)